質問

浮浪・逃亡について 浮浪・逃亡は、貧しい農民が税の負担にたえきれず起こした逃走だと考えてよいですか。

【回答者】北村 安裕

山上憶良の貧窮問答歌（『万葉集』巻五十八九二）には、農民の暮らしが次のように詠まれている。

竈には 火気ふきたてず 甑には 蜘蛛の巣かきて 飯炊く
 事もわすれて ぬえ鳥の のどよひ居るに いとのき
 て 短き物を 端きると 云へるが如く 楚取る 五十戸
 良がこゑは 寝屋どまで 来立ち呼びぬ かくばかり す
 べなきものか 世間の道

ここからは、食事もままならない中で、収税に訪れた里長を前にして途方に暮れる農民の姿がありありと浮かんできく。こうした貧しい農民のイメージを念頭におくと、奈良→平安時代の浮浪・逃亡を過重な負担にたえかねた農民の脱走として把握することはきわめて自然といえる。しかし、研究の進展の中で、こうした見方が一面的であることが明らかになってきた。そもそも、貧窮問答歌自体が中国（唐）の文学の翻案であり、当時

の民衆の生活とは必ずしも対応したものでなかった。浮浪・逃亡も、困窮した農民のやむにやまれぬ逃走という見方だけではとらえきれない現象であると考えられるようになってきたのである。

奈良→平安時代の国家は、農民たちを戸籍・計帳（合わせて「籍帳」という帳簿に登録することで把握しようとした。戸籍は六年に一度作成される基本台帳であり、これに基づいて口分田の班給などがなされていた。計帳は調庸などの課税に用いる帳簿で、毎年つくられる原則であった。浮浪・逃亡とは、こうした帳簿に登録されている本籍地（本貫）を離れて、他所に移ってしまふ行為を指す。当時の法律学者（明法家）は、税を負担する者を浮浪、しない者を逃亡と、区別して認識しているが、実際には両者の差異は明確ではなかったようである（以下、総称して「浮浪」と呼ぶことにする）。『日本書紀』において、初の全国的戸籍となった庚午年籍（天智九年（六七〇））をつくるという記事で「盗賊と浮浪とを断む」、六年ごとの戸籍の初めとなった庚寅年籍（持統四年（六九〇））の作成指示の際に「浮浪を糺し捉むべし」という表現がとられているように、戸籍の作成にあたっては、浮浪人をゼロにすることが目標とされていた。

もちろん浮浪人の中には、生活が苦しくて本貫を逃げ出すと

いう、古典的な理解に沿うような人びともいる。たとえば、養老四年（七二〇）の史料などには、私的な種粃の賃借（私出^{しす}拳）の中で身を持ち崩して逃亡した農民たちが出てくる。こうした例は他にもみえるが、浮浪人が発生する理由はそれだけではない。

そもそも奈良〜平安時代の籍帳は、生活実態としての家族や個人をありのままに記録した帳簿ではなかった。戸籍に記録される「戸」は、税の徴収、兵士の徴発、口分田の班給などといった統治の上で都合がいいように、適正な人数や人員構成をとる集団として人為的につくり出されていた。籍帳は、初めから現実と異なる内容を含んでいたのである。そして、戸籍は一度つくってしまえば、死去による削除以外には大きな変更が加えられることがない。ところが、現実の人びとは様々な必要に応じて居住地を変えていく。それはたとえば農業開発のためであり、商業上の必要のためであり、あるいは婚姻のための移住も一般的にみられただろう。こうした民衆の流動性は、籍帳ではうまく把握しきれなかった。現住地と戸籍が分裂した状態におかれたこれらの人びとは、結果として浮浪という言葉でとらえられてしまうことになる。本人の意思を確認するわけではないが、浮浪人の中には結果的にそう認識されざるをえなかった人びとが相当数含まれていたと考えられる。

このように、浮浪人が生じる際に様々な契機があるとすれば、その中に相應の資産を有する者が含まれていた可能性はかなり高くなる。養老元年の史料には、許可のない出家（私得度）や、「王臣」（貴族など）の家人（資人）になって課役を納めないという浮浪が問題とされた。ここで問題とされている人びとの少なくとも一部には、僧侶や資人になるに十分な素養を身につけた、比較的裕福な階層の者たちも含まれていただろう。余裕のある者でもできるならば税は納めたくないと思うのが世の常なのである。

では、政府は浮浪人たちをどのように扱っていたのだろうか。浮浪人対策の初期の基本となった戸令（養老律令の編目の一つ）の規定では、浮浪人たちを搜索して本貫地に連れ戻すことになっていた。この方針に変化の兆しがあらわれるのは、大宝律令の施行から十余年が経過した和銅八年（七一五）のことであった。三月月以上経過した浮浪人について、居住地でも調庸を納めるとともに、「国郡姓名」を報告することが命じられたのである。ここでは、籍帳とは異なった仕組みによって浮浪人を把握するという、やや現実的な方向性が示されたことになる。養老五年には本貫地に帰還するか現住地で戸籍に組み込まれるか選択するという制度が一時的に施行されたが、天平八年（七三六）には戸籍の枠組みで浮浪人を把握することがほぼ完

全に放棄され、現住地において「名簿」（後の浮浪人帳）に登録することが義務づけられるようになった。こうして、浮浪人が戸籍に登録される公民とは異なった独自の身分として確立したのである。宝龜十一年（七八〇）には再び居住地の戸籍への編入が指示されるが、延暦四年（七八五）に天平八年の制度に戻され、以降はその路線が定着していく。浮浪人を浮浪人として把握する仕組みは、何度かの揺り戻しを経験しながらも、最終的には主流となっていたのである。

浮浪人は早い段階から中央の貴族らと結びつきをもつ場合があったが、より全面的に展開する契機の一つとなったのは、開墾田の所有を公認した天平十五年の墾田永年私財法であったと考えられる。天平年間以前から貴族らは「荘」などと呼ばれる私有地を保持していたと思われるが、この法令が出されると、農園（初期荘園）の開発を積極的におこなうようになった。浮浪人は初期荘園の経営に取り込まれ、「王臣の荘に駆せられ、徒に課役の務を免る」（宝龜十一年）、「浮岩の徒、諸荘に集ひ、勢を其の主に戻り、全く調庸を免る」（延暦十六年）などと史料にみえるように、八世紀末には納税を拒絶して国家にも問題視されるようになっていく。こうした人びとの中には小作的な労働力として荘園で駆使される者もいただろうが、浮浪人の多様性を考えると、経営の中核になるような有力な農民も含まれ

ていた可能性が高い。かなり後の段階の史料ではあるが、承和八年（八四一）には東大寺領の越中国井山荘から、所管の「浪人」が別の荘園に移ってしまったために経営が困難になってしまったという訴えが提出されている。浮浪人の存在が荘園の経営状況を左右するような場合もあったのである。

八世紀の末頃から九世紀に入ってくると、籍帳による人民把握の仕組みは破綻がみえるようになった。原因としては、郡の役人（郡司）に就いていたような地方豪族の権威が失墜したからだとか、浮浪人がさらに増加したからだとか、様々な説明がなされているが、移動する民衆の追跡がこの段階ではもはや絶望的となってしまった点も重要だろう。当然ながら、籍帳に把握されない浮浪人の数は増加し、そこに含まれる階層もますます多様化することになった。

この頃の史料によくあらわれる表現として、「土人・浪人を論ぜず」というものがある。これは、戸籍に登録された人民（土人）と浮浪人を区別せずに政策の対象とする、という意味である。浮浪人を帳簿によって把握する仕組みが確立していく一方で、戸籍による人民の把握が難しくなってくるとすると、浮浪人と一般の公民を区別しない政策が施行されていくことは、自然な流れといえよう。こうした中で、元慶五年（八八一）に中央官司の財源として新たに官田が設定された際には、「土人

浪人を問はず」に経営を委ねるといふ方針が打ち出された。かつて国家による人民把握に背反する存在として忌避されていた浮浪人は、ついに国家財政の捻出に一役買うものとして重視されることになったのである。「富豪浪人」といふ言葉が史料にみえるのは、ちょうどこの時期のこと（元慶八年）である。

この頃、稲などの財産を多く蓄えて、それをもとに農業経営を進めるとともに、時には国司や郡司といった支配機構に抵抗する人びと（いわゆる「富豪層」）が活躍するようになっていった。元慶八年の史料にあらわれる「富豪浪人」は、具体的にはかつて国司として赴任していた者の子弟たちであった。彼らは、土着して国司らの徴税に抵抗したために、国家から問題視されている。中央貴族から選ばれる国司の子弟すら、この頃には浮浪人としてごく自然に把握されているのである。このほか、史料には直接あらわれてこないが、かつて他所から移動してきた有力な農民たちも性格の上では「富豪浪人」と呼ばれる資格をもっているだろう。

このように、九世紀を通じて浮浪人に含まれる階層はますます増え、その中の裕福な者たちが社会的役割を高めていったと考えられる。その後、籍帳が完全に有名無実化すると、浮浪人というくくり自体に意味がなくなり、言葉自体も史料から姿を消していくことになる。

浮浪人は初めから多様な階層で構成されていて、社会の動向に応じて微妙にその構成を変えていった。したがって、たとえば貧しい農民などといった単一の主体として彼らを把握することは正しくない。国家の構築しようとした人民把握の仕組みについても理解を深めながら、それぞれの時期の浮浪人の構成と動向について、冷静に考えていくことが必要といえよう。

（きたむら・やすひろ／岐阜聖徳学園大学講師）